

『法華經』に説かれる“さとり”とは何か？¹⁾

久 保 継 成

0-0 仏教は、仏教徒に涅槃の境地を求めることを説くものであり、それが仏教の“さとり”である、今日でも常識的には、そう考えられている。しかし、『法華經』は、涅槃 (nirvāṇa) ではなく阿耨多羅三藐三菩提 (anuttarā samyak-saṃbodhi) という心の境地を実現することを説く。

0-1 『法華經』で菩薩の修行を描写する際、bodhi や anuttarā samyak-saṃbodhi は、ひとつの精神的領域を言う言葉として用いられている。偈では bodhi, agra-bodhi などが anuttarā samyak-saṃbodhi の省略形として用いられる。

0-2 仏果を得ること、菩薩行の最終目的は、anuttarā samyak-saṃbodhi に abhisam√budh する（完全に目覚める）と表現される。

0-3 一方、般涅槃について『法華經』に示される周知の仏説は、釈尊は anuttarā samyak-saṃbodhi を abhisam√budh しているのであるが、parinirvāṇa、般涅槃の境地には入らない (parinirvṛta ではない) というものである²⁾。

では『法華經』に般涅槃ということと阿耨多羅三藐三菩提ということがいかに説かれるか、またそれは何故かを、ここで検討整理することとする。

1-0 『法華經』に説かれる“さとり,” bodhi, anuttarā samyak-saṃbodhi は修行の末に得られる静的な境地ではなく、修行中に生み出されていくひとつひとつの気づきをいう動的な心のあり様である。

1-1 經初、經は、菩薩と“さとり”についてかかる位置づけを明示している³⁾。東方の仏世界を描写する中で、菩薩については次のように総括される。

...ye bodhisattvā... vividhena vīryeṇa janenti bodhim
(I vs 13, KN 10.9, WT 8.11)

この偈文は「さまざまな努力によって bodhi を生み出している菩薩たち」と読み、また読むべきであろう。bodhi は、修行の末に得られるものではなく、現に修行している、その時と場で菩薩の心に生まれるものであるということになる。

ちなみに、カシュガル写本では、この部分はまったく異なった次のような表現になっている。

...caranti bodhau (The N.F. Petrovsky Collection, ms. *caramti*, for. 17a 5-6)

この bodhi の於格は、サンスクリット刊本が一様に採用しているネパール系写本に共通の前掲 janenti bodhim が菩薩が修行するその時点での事柄を述べていると理解するのが順当な読みであることを念頭に置けば、“さとり（という精神的領域）の中で修行している”ということを述べているのである。

1-2 また、序品では、vs13の手前、vs7 から vs11 の流れで次のような表現もある。

buddhāṃś ca paśyāmi... (I vs 7 KN 9.9, WT 7.8)

.....

ye cāpi anye sugatasya putrā...

.....

teṣāṃ pi bodhīya vadanti varṇaṃ // (I vs 11 KN 10.5 WT 8.2)

（また、仏たちが見える…そして他の仏の子ら（菩薩修行者）に…“彼らの” bodhi に称讃を告げている（仏たちが見える））

1-3 bodhi が仏ならざる者たちの共有できる領域として述べられる例をあげると、以下のようなものがある。

caranti ete vara-bodhi-cārikāṃ (V vs 44, KN 131.12 WT 123.1)

（（すべての弟子は涅槃をめざすのではない）至高のさとり（bodhi）の生き方をしているのだ）

sthito 'smi bodhaye (IX vs 7, KN 219.10 WT 192.15)

（（アーナンダが言う）私はさとり（bodhi）の領域に立っている）

kena bodhīya sthāpitāḥ (XIV vs 25, KN 306.3 WT 259.19)

（誰れによって（彼らは）さとりの境地（bodhi）に立たされたのか）

evam eva Bhaiṣajyarāja dūre te bodhisattvā mahāsattvā bhavanty anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau yāvan nēmaṃ dharma-paryāyaṃ śṛṇvanti... (KN 233.6 WT 202.16)

（実にこのように、薬王よ、この法門を聞かない限りその菩薩摩訶薩たちは anuttarā samyak-saṃbodhi にはほど遠い）

dūre yūyaṃ kula-putrā anuttarāyāḥ samyak-saṃbodher na tasyāṃ yūyaṃ samdrśyadhve / (KN 285.9 WT 244.4)

（おまえたちは anuttarā samyak-saṃbodhi から遠く離れ、おまえたちはそこには見あたらない）

2-0 『法華經』は基本的に『法華經』以前にあった声聞乗や先行する大乘仏

(186) 『法華經』に説かれる“さとり”とは何か？（久 保）

教が教える教理を踏襲して説いていく．ところが、『法華經』の説く内容は、先行する教理のとらえ方に否定的である．『法華經』は、私たちの現実世界に対する知的認識は、菩薩行の中で実際に実感された時、はじめて価値あるものとなるという態度につらぬかれている．

2-1 『法華經』にも、anātman 無我などが正しい基礎的判断として説かれている．

...ātma-dr̥ṣṭi-bhava-dr̥ṣṭi-vibhava-dr̥ṣṭi-sarva-dr̥ṣṭi-vivarjitānām...

(WT68.19, KN71.2, cf. WT p68 note5)

((すべて) 我 (あり) という誤見, 生という誤見, 滅という誤見, あらゆる誤見を捨て去っているところの…)

『法華經』に説かれるところは、しかし、個々人がこのような基本的認識にたつことのみにとどまることを否定する．

2-2 第四章冒頭で、阿羅漢に次のように言わしめている．

...śūnyatānimittāpraṇihitaṃ sarvaṃ āviṣkurmo nāsmābhir eṣu buddha-dharmeṣu buddha-kṣetra-vyūheṣu vā bodhisattva-vikrīḍiteṣu vā tathāgata-vikrīḍiteṣu vā spr̥hōtpādītā / (KN101.1, WT95.19)

(空, 無相, 無作すべてを究めても, 私たちにはこの仏のあり方や, 仏の世界がととのえられることや, 菩薩の活躍や, 如来の活躍において, 発揚する心は生じませんでした.)

この声聞乗の代表者たちに表現させている態度は、知的認識とは別の角度から仏や菩薩についてとらえる姿勢を明確にしている．

2-3 nirvāṇa についても、第二章では誤った見解にとらわれている人に、方便として涅槃を説いたのだと明言している．

neṣāṃ ahaṃ Śārisutā upāyaṃ

vadāmi duḥkhasya karoṭha antaṃ /

duḥkhena saṃpīḍita dr̥ṣṭva sattvān

nirvāṇa tatrāpy upadarśayāmi // (II vs 67, KN48.9, WT45.8)

(舍利弗よ, そういう者たちに私は方便を (説く))

「苦を滅せよ」ということを説く

苦によって打ちひしがれた衆生を見て

その状況に対して (tatrāpy) 涅槃を説き示す)

3-0 涅槃ということへの批判はそのままこの經の主張となる．經は第四章で声聞に次のように発言させている．

pratyātmikīm nirvṛti kalpayāma

etāvatā jñānam idaṃ na bhūyaḥ /

nāsmāka harṣo pi kadā-ci bhoti

kṣetreṣu buddhāna śruṇitva vyūhān // (IV vs 42, KN117.1, WT109.18)

（私たち自身の涅槃というものを考えると

この知（jñāna）はこの程度でそれ以上ではない

私たちにはちっとも燃えるもの（harṣa）がない

諸の仏の世界のととのっていく状態（vyūha）を聞き学んでも）

3-1 仏や菩薩のこの世での活躍に対して、自分の意識が発揚される。すなわち経は、人間の発心に起因する行動を重視する。経は harṣa（喜び、興奮）すなわち“そうしたくなる”“その気になる”ことが、仏の世界の一員となるための原動力であると説く。前掲の偈につづいて、経は観念的に教理を理解するだけでは、仏説についての信念（śraddhā）は生れないと説く。

śāntāḥ kila sarv' imi dharma 'nāsravā

nirodha-utpāda-vivarjitāś ca /

na cātra kaś-cid bhavatīha dharmo

evam tu cintetva na bhoti śraddhā // (IV vs 42, KN117.3, WT110.1 kilā)

（確かにこれらすべての存在は鎮まった状態であり、浄らかだ

滅することも生じることもない

それゆえここにはいかなる法則性（dharma）もない

このように考えてはいても、（仏説への）信念（śraddhā）は生れない

このように経は声聞の立場を批判しているのである。

3-2 ここに説かれる śraddhā の意味は、第二章で adhimukti という概念と共に修行の為の重要な要素として説かれている⁴⁾。

第四章では声聞の修行者に、...saṃsāre ca hīnādhimuktikāḥ / (KN 109.1, WT 102.2)（生死の世界に生きながら低い志しか持てない者たち）であったと言わしめている。そこで仏がされたことは次のようである。

suduṣkaram kurvati loka-nātho

upāya-kausālya prakāśayantaḥ /

hīnādhimuktān damayantu putrān

dametva ca jñānam idaṃ dadāti //

(IV vs 49, WT 110.25, KN 118.5 suduṣkaram)

（この世の主（仏）はきわめて難しいことをされる

巧みな方便を説かれ

志の低い子供たちを育て

(188) 『法華經』に説かれる“さとり”とは何か？（久 保）

育ててから、この（仏の）智慧を彼らに与える）

『法華經』で説く釈尊は、観念的理解では満足せず、個人の現実の精神状況に焦点をあて、縁起の世界に生きるこの世の衆生を、動的にとらえる姿勢を示していると言えよう。

4-0 『法華經』は“さとり”を現実のものとする一方で、般涅槃する仏を否定することで、仏が生きた人間の菩薩行を応援する（守護する）働きを果たす立場を明確にしている。

4-1 bodhi, anuttarā samyak-saṃbodhi は形而上学的存在に関わることというより、そこで菩薩が気づき、目覚め、さとることの出来る精神的な場、精神的領域を示している。

コンテキスト（1-3）を通して、bodhi が菩薩の手中にあることがわかる。それは、来世に期待されるような菩薩の最終目標ではない。この世での精神的な場、その意味での領域であり、そこで修行者はひとつひとつ自分自身のこころの縁起するあり方に目覚めていくのである。

4-2 既に述べたように、釈尊は parinirvāṇa の状態に入っていない。ということは、釈尊は anuttarā samyak-saṃbodhi の領域に完全に到達しておられ、しかもこの世にとどまっておられる。

4-3 さらに、多宝如来の出現は注目に値する。多宝如来は第十一章、見宝塔品で釈尊説法の際に登場する。多宝如来ははるか昔に般涅槃された仏である。その多宝如来が、第二十章、如来神力品まで釈尊説法の際におられるのである。

如来神力品には次のように説かれる

atha khalu bhagavān Śākyamunis tathāgataḥ sa ca bhagavān Prabhūtaratnas tathāgato 'rhan samyak-saṃbuddhaḥ parinirvṛtaḥ...

(KN 387.7, WT 328.2. cf. KN 389.2, WT 329.9. XX vs 7; KN 393.3, WT 332.14.)

（そして実に如来である釈迦牟尼世尊と、かの般涅槃されている如来であり応供であり正等覚者である多宝世尊が…）

ここで経が般涅槃していない釈尊と般涅槃されている多宝仏ということを対比して述べていることは明白である。

4-4 多宝仏は過去の仏である。4-3 に引用した経文では parinirvāṇa と parinirvṛta は同義に用いられている。さらに第十一章で多宝仏の為に仏塔を造ることが述べられているので、これらの言葉はここでも仏の死を意味している。

ちなみに、anuttarā samyak-saṃbodhi は過去に多宝仏が仏に成る前、菩薩として

修行したことを述べる中で述べられている。

多宝仏の過去の修行を説く内容では、*parinirvāṇa* (*parinirvṛta*) と *anuttarā samyak-saṃbodhi* は別の問題として述べられているのである。

4-5 では、この引用した第二十章、如来神力品の経文に述べられる、般涅槃した多宝仏と、般涅槃していない釈尊が一緒に行動し働くということ、そして共にこの現実世界に関わるということは何を言っているのか？

経説から言えることは、第1に釈尊は死んでいないと経が説いていること、第2に死んだ多宝仏が釈尊と共に働く中でこの現実世界と関わっていることである。

5-0 さて、*bodhi*, *anuttarā samyak-saṃbodhi* の概念は到達目標としてだけでなく、そこに至る道として示されている。この概念の中が、人びとのひとつひとつの気づきから完全にさとった仏の属性としての仏の現実にかかわっての働きまでを、同じ“さとり”という概念によって、つながりをもって人びとにとらえさせる。『法華経』に説かれる“さとり”は、人びとの気づき、目覚めのよろこびから、仏の境地とその働きを包み込む概念である。

-
- 1) この稿は、2008年6月28日エモリー大学（アメリカ、アトランタ）に於ける第15回国際仏教学会学術大会でのパネル“Recovering Anew the Lotus Sūtra's Originality as a Religio-philosophical System”での発表原稿を基にしている。
 - 2) 1991年、第10回国際仏教学会学術大会（於パリ UNESCO 本部）での発表“*Anuttarā samyak-saṃbodhi* set against the concept of *parinirvāṇa* as depicted in the Lotus Sūtra”で論じた。この発表は1992年、*Indian Journal of Buddhist Studies* (Varanasi) に掲載された。
 - 3) 1987年、第8回国際仏教学会学術大会（於カルフォルニア州立大学バークレー校）で発表した。
 - 4) 拙著『法華経菩薩思想の基礎』1987年、春秋社

〈キーワード〉 法華経, さとり, *Anuttarā samyak-saṃbodhi*

(在家仏教こころの研究所代表, 博士(文学))